

# 第二章

## 神父への道

終身誓願を立て、スイスの神学校へ



## 戦後のどさくさの中で上智大学へ進学、終身誓願を立てる

原爆が落ちて1週間で終戦になりました。しばらくは家に居たのですが、マリア会の本部から早く戻るようにという指令が来たので、東京に帰りました。サツマイモを持って、鈴なりの貨物列車に乗り込んで東京に向かいました。

翌年の1946年(昭和21年)、カトリックの神父になるために必要なラテン語と哲学を学ぶべく、上智大学に進学。ラテン哲学科は神父を目指している学生が多い科でした。その頃の上智大学は、まだ小さな大学で男子ばかり。終戦後のどさくさの時代だったので、ちょうど予科と本科の切り替えがあり、5年間在籍しました。最初の2年間はラテン語をみっちりやり、その後3年間哲学を勉強したんです。

全世界から集まった100人ほどの宣教師が指導してくれ、授業内容は充実していました。出欠をキチンと取り、遅刻・代返はもつてのほか。高等学校より厳しい教育でした。特にラ哲は厳しく、ラテン語ができないと落第でした。

ひたすら勉強に明け暮れた5年間でしたが、戦後のどさくさで食べる物も着る物も、何もかもがない時代でした。街ではヤミ屋やカツギ屋が横行していましたが、私には関係ない世界のこと。すでに修道士になっていた私はお金を持っていなかったため、食堂に入ることもなかったんです。だから、友達が何回かお茶をご馳走してくれるようなこともありましたね。

大学を卒業すると、終身誓願を立て、神父になることが認められました。初誓願から6年後でした。毎年、誓願を更新し、辞めていく人たちも見ていましたから、神父になるのは自分の選んだ道という覚悟はできていました。無期誓願とも言うのですが、終身誓願の式では、床に腹這いになってその上から棺桶をかぶせます。

もはや、俗社会では死んだという意味なのです。実際、親が病気であつても帰してくれません。もちろん、親が死んだ時は帰れますが、それだけの信念がなければ、神父にはなれないのです。

終身誓願を立てたからには、修道会の本部の命令が出ればそれに従わなければいけません。会社の辞令のようなものですが、私たちはそれを一生抱え込まなければいけません。会社の辞令のよう

戦争中に大勢の神父が軍隊に入隊して、戦死者も多数出ていました。だから、神父が不足していたのでしよう。できるだけ早く神父を養成したいという事情があったらしく、私は大学を卒業した年の夏には、スイスの神学校への進学を指示されました。

## 横浜港から「ラ・マルセイエズ号」でフランスへ出航

1951年(昭和26年)8月、スイスのフリブル大学神学部へ進むため横浜港から「ラ・マルセイエズ号」でフランスに向かいました。マッカーサーが解任され、サンフランシスコ講和条約が調印された年です。前年には朝鮮戦争が勃発。特需景気で経済が上向き始めたとはいえ、まだまだ物のない時代が続いていました。

横浜港で「ラ・マルセイエズ号」に乗り込んだ途端、国際社会に身をおくことになりました。私は修道院で生活していた時にフランス人やアメリカ人の宣教師がいましたから、外国人の生活スタイルには多少慣れていたので、船の中は完全な外国の社会になり、やはりカルチャーショックはありません。

まず、食事。1人でフルコース式の食事を食べるのは初めてのこと。ステーキにジャガイモやコンフレ

クなどが出ました。本当はガツガツ食べたいんですが、マナーに従って丁寧に早く食べなければいけません。しかも、日本人なんて少ないから、周囲の船客がジロジロ見るし、ウェーターも控えている。修道院にいる時に洋食のマナーは教わっていましたが、フォークやナイフは使い慣れていないでしょう。それに、よく切れないナイフでね。ある時、出てきたステーキを切ろうとしたら、肉が硬かったんです。切れないナイフで力を入れた途端、肉がパーンと床にダイビング(笑)。もう、恥ずかしかったですよ。真っ赤になって、うつむいてしまいました。誰もいなければ、自分で拾って食べたんですけど(笑)。

テーブルはいつも大体同じ場所、周りはアメリカ人やスイス人でした。台風に遭うと、船酔いしてみんな出て来ない。私は飢えていましたから、そんな日でも食べに行ったもんです。とにかく、お腹いっぱい食べられるのがうれしかったですよ。

そう言えば、船の食事で生まれて初めてワインを飲みました。昼食と夕食にはワインやビールが出るんです。船では水が貴重品。最初「水が欲しい」とウェーターに要求したら、「金を払え」って言うでしょう。ワインやビールは食事代金、つまり乗船料に含まれているからタダなんです。マリア会からはトラベラーズチェックで50ドル持たされているだけだから、タダのワインを飲むことにしました。水代わりだから、ワイングラスなんて上品なものじゃなくて、コップになみなみと注いである。飲まないし食事ができないから、2杯ぐらい飲んでいました。

31日間の船旅の間は、毎日、お酒が出ました。でも、スイスに着いてからは、水がキレイで美味しいところだから、食事の時にワインは出ませんでしたね。ただ、イースターやクリスマスなどのカトリックの祭日にはワインが出るんです。祭日には荘厳なミサを行って、精神的な喜びを得る。肉体的にも、ワインを飲んで喜びを得なさいというわけ。みんな、喜んで飲んでいました(笑)。

私はお酒に強い体質らしく、初めから酔うということはありませんでした。だけど、美味しいと思うのはワインでもビールでも最初の一杯。だから、たくさん飲みたいとは思わないんです。

## 沖繩の密航少年と仲良くなる

船には世界各国の人が乗っていました。香港やマニラ、シンガポールでは、まだ反日感情が激しくて下船させてくれませんでした。ベトナムで降りた時は内戦状態。メコン河ではフランス兵がゲリラに銃をかまえていたり、サイゴンの街ではフランス人の水兵が殺されたり。

船にはいろんな人が乗っているから、ベトナム人やスリランカの人とも友達になって、下船する時に自宅に招待してもらって、(馳走)になったり観光したりしました。友達になる時に、自宅に招待してくれないかなという卑しい下心がありましたよ(笑)。だって、タダで食べられて観光もできるんだから。

外国の人と仲良くなる方法ですか？ ヨーロッパでは女性はすごく大切にされるんですけど、男性は鼻もひっかけられない。だから、黙っていたら友達になれないんです。心臓強くしてね、こちらから話しかけること。私は夫婦や家族で乗船してない寂しそうな人に話しかけて、友達になりました。一緒にデッキを散歩していると、またいろいろな人と知り合えて、楽しかったですよ。

中には密航者もいて、その人とも友達になっちゃいました(笑)。

沖縄出身の17、18歳の男の子でしたけど、お母さんがアメリカへ行ってしまったらしくて、お母さんに会い

たい一心で沖繩から密航したんですね。ところが、乗り込んだ船はアメリカではなくて韓国の釜山行き。当時は朝鮮戦争の最中でしたから、釜山に降りたら戦争やっているんでビックリ仰天。帰りの船でまた密航、神戸に着いてウロウロしていたら、我々が乗っていた「ラ・マルセイエズ号」が来て、またまた潜り込んでしまったんです。どうして何回も密航できたのか不思議に思っ「どうやって船に乗ったの？」と聞いたら、船荷の上げ下ろしをする沖仲仕に化けたんだって（笑）。

「ラ・マルセイエズ号」の時に何でばれたかと言うと、乗り込んでから隠れ場所を捜しているうちに、厨房の大きな冷凍室を見つけて、涼しくていいなと中に入っちゃった（笑）。冷凍ということ自体知らなかったんですよ。中はマイナス何十度ですから、出航して何時間かすると寒くて仕方ない。中からは開かないようになっていたから、ブルブル震えながら、ドアをパンパン叩いたんです。音を聞いた人はビックリして、中に化け物がいるんじゃないか、って大騒動になった。恐る恐る開けてみたら、彼がいたというわけ。見つかったからは、毎日デッキを掃除させられていました。私も退屈だし、日本人らしいから話しかけたんですけど、喜んでいろいろ話を聞かせてくれました。

沖繩の漁師で、戦争中、海で漁をしていた時にアメリカ軍の飛行機が来ると、怖くて海に飛び込んだそうです。海に潜って飛行機が行ってしまうのを待っていると、今度は海中からフカがだんだん寄ってくる。「僕は海の上でも下でも両方戦って生き延びたんだ」と言っていました（笑）。彼は香港、マニラと回ってサイゴンで降ろされました。別れる時は、私も貧乏なりに「靴はあるのか？ タオルは持っているか？」と聞いて、自分の物を彼にあげましたよ。「元気で頑張れ！」って励まして送り出しました。

## 追い払われた4等船室の友達

この時の「ラ・マルセイエズ号」には、私以外にも日本からの留学生が乗っていました。1等船客にはフランス政府給費留学生の黛敏郎など数人がいて、2等は私1人でした。その他、4等には上智大学の第1回ヨーロッパ留学生になった村山素夫や篠田雄次郎がいました。

船の等級による待遇の差は厳格なものがあるのですが、初めての船旅でそんなことは何も知りません。同じ日本人の留学生ということ、乗船直後から親しくなり、4等にいる友達は私の部屋に来て遊んでいくこともしょっちゅうでした。午後3時になると、1等や2等の船客にはお茶のサービスがあり、私の船室で一緒にお茶を飲んでいました。最初の頃は誰が何等の船客なのか、船員もわからなかったのです。ところが、出航して2、3日すると「4等船客にはお茶を飲む資格がない」と言っ、パーサーが彼らをシッシと追い出すんです。あげくの果て、彼らと付き合っていたというので私は2等に潜り込んだ4等船客と間違われて、部屋を追い出されそうになりました。2等だと証明したら、今度はずいぶん恐縮していました。

2、3日して彼らがいる4等船室に行ってみたら、船底で蚕棚のベッドでした。軍隊の捕虜が寝るようなところだと驚きました。神戸から香港に向かう途中で台風に遭遇した時は、船底で揺れが激しく、彼らは船酔いして気分が悪くなって、私の部屋に来て寝ていたんです。私の部屋がちょうど4人部屋だったから、船員に見つかっちゃった。「何で4等の人間がここで寝ているんだ」と有無を言わせずに追い出されてしまった。私はどうでもいいじゃないかと思うんだけど、それくらい船の中は等級によって格差があるんですね。それと、フランス人の船員にとって日本人はこの間まで戦っていた旧敵国人。あまり、いい感情を持っていなかったことも影響していたのかもしれない。

1等船客の留学生とも交流があり、日本に帰国してから彼らがどんどん有名になっていくのでビックリしました。当時は海外に出るのに実質的にG・H・Qが承認したパスポートが必要で、公用以外はほとんど認められませんでした。誰でも気軽に海外に行ける現在とは全く状況が違います。若者が海外に出ようと思っても、留学するための試験にパスしなければ、パスポートはなかなか取れない時代でした。海外で勉強できること自体がエリートでした。しかも、外貨の持ち出し制限もあり、1ドル360円の固定相場制。留学するにしても、警沢な生活は望めませんでした。

ですから、観光気分で行く人はいなくて、みな志を立てて海外で学んでこようという意気込みだったので。私もスイスでシッカリ勉強して神父になるんだ、という強い決意を持つての渡航でした。

スエズ運河経由でマルセイユまで31日間、マルセイユからスイスまでは汽車の旅です。マルセイユではマリア会の修道士が出迎えてくれ、ジュネーブを通ってフリブールに着くと、神学生が入る修道院に行けば部屋が用意されているという具合で、マリア会の全世界的な組織があるので、旅行自体には何の不安もなく、無事にフリブールに到着しました。

## 多国籍の学生が集まっつての集団生活

スイス・フリブール州の州都フリブールは、12世紀からの歴史をもつ古都です。スイスでも屈指のカトリックの町で、市街地のはずれにあるフリブール大学は森や林に囲まれた閑静な環境でした。神学部は世界的に有

名で、アメリカ、スペイン、フランス、オーストリア、イタリア、スイス、カナダ、ペルーなど各国から85人が集まり、修道院で寝起きを共にして、大学で授業を受ける生活でした。

朝、起床して朝食を済ませると、25分ほど歩いて市街地を抜けて大学へ。昼食のためにいったん修道院に帰り、午後からまた大学へ行って授業を受けます。1日1銭のお金も使わないで、生活できるシステムになっていました。

修道院の生活は、同じ修道会のメンバーだからみな平等。同じ会則のもとに生きている兄弟というわけです。掃除は自分の部屋とそれ以外の場所も平等に分担してやりました。一番マメに掃除していたのはアメリカ人と日本人です。アメリカ人と言うと、いつもチューインガムをクチャクチャ噛んでだらしなくて不器用というイメージがあったのですが、トイレの掃除などは彼らが一番上手かったですね。壊れた床の修繕やペンキ塗りなども上手でした。

洗濯はクリーニングに出すんですが、全員に番号があり、その番号を下着にも靴下にも付けて出しました。何しろ85人の共同生活だから、番号がないとわからなくなっちゃう。囚人みたいに番号で、「26番、洗濯物を出しなさい」とか言われるんです(笑)。でも、おかげで靴下1枚迷子になりません。洗濯に出せば必ず戻ってくる、便利なシステムなんです。

学内での公式語はフランス語、講義の必修科目はラテン語、選択科目はフランス語かドイツ語でした。説教の練習はフランス語で、ミサはラテン語。一番人数が多いアメリカ人は、当然英語でコミュニケーションしていました。

修道院と大学の往復や休み時間の散歩の時に、いろんな国の人と友達になりました。仲良くなったフランス人と一緒に歩きながら話すと、フランス語の勉強になるでしょう。アメリカ人と仲良くなれば英語をしゃべる

から、英会話の勉強ができてしまうんです。

日本人は私ともう1人の2人しかいなかったから珍しがられて、話しかけるとみんな仲良くしてくれました。イタリア人やスペイン人はほがらかで、いつも歌ったりおしゃべりしていましたね。アメリカ人はとても親切でした。

私の洗礼名はドミニクと言うのですが、「ドミニク、1人なら一緒に大学まで行こう」とか、日曜日の運動の時間も「一緒にやろう」と誘ってくれたり、自然に声をかけてくれるんです。最初の頃は、日本からの荷物がまだ着いていないから、下着や靴下、ハンカチなど日用品も持ち手が少なかったんです。余分なお金なんか持っていないので、買うこともできません。アメリカ人は戦勝国で経済に余裕があるから、4年分の下着やハンカチを持ってきていました。「ドミニク、荷物がまだ着かないんだらう。ハンカチはあるのか?」。

と聞いてくれ、「2、3枚ある」と答えると、「何ダースもあるから、僕のを使っていよいよ」ってポンとくれるんです。本当に親切だなと思いましたね。

アメリカ人はフランクで、デイスカッションしているうちにエキサイティングしてケンカしても、議論が終わればそれでおしまいというサッパリしたところがあるでしょう。「おまえたち、真珠湾を攻撃したじゃないか」「そっちは原子爆弾を落とさただらう」などと言いつ争っていても、翌朝は「グッドモーニング、ドミニク。ハワユ?」って笑顔で話しかけてきて、ケロツとしているんです。こちらは、あれ、昨日ケンカしたのに「って面食らいましたけど(笑)。日本人は陰にこもると言うか、ケンカすると2、3日冷戦が続いて、カッコした状態が冷めてくるまで時間がかかるでしょう。それに比べて、アメリカ人のフランクさは好きでした。

もちろん、もう1人の日本人とは一緒に食事したり、散歩をしたり、誘い合って、休み時間を一緒に過ごすことが多かったですね。

夏休みは、みんなでバスに乗ってイタリアとスイスの国境地帯にある山小屋に行つて、2、3週間過ごしました。山登りをしてエーデルワイスなどの高山植物を採つたり、朝3時頃に起きてアルプスの朝日を見に行つたり。けっこう楽しかったですよ。

大学3年の時には、学生委員のような役になっていろいろな雑用をしました。例えば、学生の仕事の分担の決定。修道院内の清掃の分担や散髪係などを決めたり、神父がいらない女子修道院や刑務所などにミサをあげに行く人を選んだりするのです。アメリカ人は食べ物にうるさくて、美味しい食事が出るころに行かせると言うし、刑務所は汚いし食事はまずいからみんなイヤがるわけ(笑)。それを納得させるのが大変でした。

## 念願の神父に

修道院に初めて入った時は、修道生活がどういうものか全く分かっていませんでした。清貧、貞潔、従順を誓うと言つても、まだ人生経験も少なく、今のようにはテレビなどマスコミが発達して情報がたくさんある時代ではありませんから、想像するよすががなかったのです。

修道院の生活に慣れ、スイスで神父になると決意を固めて渡航したわけですが、その留学生活についても想像できませんでした。船上では初めて外国式の生活を体験。船客がダンスするのをジッと眺めて、文化が違う、すごいな、と思ったものです。そうすると、神父になるための勉強についても心配になってきました。フランス語やラテン語は大丈夫だろうか、まったく日本語なしの授業についていけるだろうかと不安でした。

そんな状態で留学生生活がスタートしたので、頭の中はフランス語やラテン語の講義を受けて、無事に試験にパスしなければいけないということだけでした。ですから、真剣に勉強しました。大学3年を修了すると神父になり、4年目は勉強を続けながら神父の見習いをします。3年を無事に修了した時には、「神父になれた」という達成感がありました。フリプールのサン・ミッシェル教会で行われた司祭叙階式は、念願がかなったという感慨が深かったですね。

## スイス人神父の好意で実現した荘厳な初ミサの感激

神学生にとって神父になったというのは、一般の人にとっての結婚のようなもの。司祭叙階式や神父になって初めて行うミサというのは、結婚式のように晴れがましい場なのです。地元のスイス人はもちろん、フランス人やスペイン人も両親や家族、親戚などが大勢やって来ます。アメリカ人も戦勝国で金持ちだから、みんな家族や知人が来ていました。

そんな中で、私は1人ぼっち。日本から家族を呼ぶなんて夢のまた夢でした。誰も私の初ミサに関心をもたない中で、スイス人のジョニー神父という方が自分の教会に私を呼んで初ミサを行ってくれると申し出てくださったのです。

スイスはフランス語圏とドイツ語圏があります。ジョニー神父の教会はドイツ語圏だったので、ドイツ語ができない私は困ったなと思ったのですが、「ドイツ語がわからなくても、一生懸命やればいいじゃないか」と

考えて、好意に甘えることにしました。ジョニー神父の親切な申し出は、本当にうれしかったですね。

新しく神父が誕生して初めてミサを行うというのは、その教会にとって大きなお祭りなんです。信者が3000人くらいいる教会でしたが、半年くらい準備して大歓迎してくれました。アルプスの山々に囲まれた美しい教会で、1週間荘厳な初ミサをあげさせてもらい、侍者を伴った華やかな大行列を催してくれるなど、教会を挙げての歓迎に感銘を覚えました。

ジョニー神父とは現在まで交際が続いています。神父は30年前からパリに住んで、フランスにいるスイス人の伝道師を指導しておられます。私がヨーロッパに行った時には泊めていただいているし、私も神父を2回ほど日本に招待しました。2回目の時はお年を召していたので、普段身の回りの世話をしているシスターも一緒にお呼びしました。神様と出会って友達になることが神父の必要条件ですが、人間との出会いも大切です。ジョニー神父との出会いには本当に感謝していますし、できることは何でもしてさしあげたいと思っています。

ちなみに暁星の卒業生が奨学金でパリに留学する時などに、ジョニー神父を紹介して、1週間に1、2回でも指導を受けるように勧めています。生徒は神父のところでご馳走になったり、フランス語を教えていただいたり。中には洗礼を受けた生徒もいます。

## 南仏を回って、「クイーンエリザベス号」でアメリカへ

スイスには神父としてもう少し残っていたのですが、日本からは人がいないので早く帰れという命令でした。1955年（昭和30年）7月にフリブル大学を卒業して帰国するのに、どうせだからと往きの「ラ・マルセイエズ号」で一緒だった村山素夫がいるツルーズに寄って、南フランスを回り、イタリアも見て、北フランスのシェルブルールから「クイーンエリザベス号」で大西洋を横断。アメリカの各地も回って日本に戻ってきました。

フリブル大学に在籍していた4年間で、地元のスイス人の素晴らしさを知ったのは、北イタリアで洪水が起きたという話が伝わってきた時のことです。すぐに市民たちはフリブルの駅前に机を運び出し始めました。そして、机の上から持ってきた救援物資を置いていったのです。机の上の物は、駅から列車でイタリアに運ばれて行きます。もちろん、名前なんて書きません。与える喜びを知っている人たちの行動だなと感嘆しました。小さい時からの教育で、奉仕の心が備わっているんだなと思いました。

帰国旅行中にも、欧米の人たちのさまざまな生活習慣や気風を知ることができました。

フリブルを出て、ツルーズで勉強していた村山に4年振りに再会。彼はプジョーのオートバイを乗り回していたので、相乗りさせてもらって、カトリックの聖地ルルドまで旅をしました。

ツルーズからルルドまで約180km。東京から静岡までと同じくらいの距離をオートバイで走るのでからお尻は痛くなるし、村山が時速100kmも出すので、ずいぶん怖い思いもしました（笑）。黒い僧衣と黒い帽子を被り、左手で彼にしがみつき、右手で帽子を押さえてオートバイに乗っている光景は、端から見るとおかしかったでしょうね。ルルドに着いた翌朝には、バシリックの聖堂でミサをあげました。

ルルドが何で聖地なのかと言えば、1858年、14歳の少女ベルナデッタ・スピルーが薪を拾いに来た洞窟で聖母マリアが現れ、その指示に従って教えられた場所を掘ると泉が湧出。その清水を飲むと病気が治ったという奇跡が起こり、ルルドはカトリック信者の巡礼の地になったのです。今でも年間400万人の人が訪れ、洞窟や泉への参道には土産物屋が立ち並んでいます。

ルルド旅行から帰ってくると、今度はツルーズから約120km離れたオッシュュにある女子修道会経営の「サン・ルイ子供の家」を訪問。もちろん、また村山のオートバイに相乗りで行ったのです。オッシュュはダルトニヤン三銃士の舞台となった地方。起伏に富んだ地形で、やはり相乗りで怖かったですね（笑）。村山が住んでいた学生寮を経営しているフランシスコ会の神父が「サン・ルイ子供の家」の指導司祭をしている縁で、村山が度々訪ねていたんです。私は初めて「サン・ルイ子供の家」を訪れた日本人神父ということで、修道院長以下のシスターから大歓迎を受けました。翌朝、ここでもミサをあげました。

旅行中に思ったのは、欧米ではカトリックの神父に対して人々が信頼を寄せて、親切にしてくれるということです。アメリカなどは神父には飛行機代をデイスカウントしてくれるんですよ。だから、悪いことはできません（笑）。もつともスペインみたいに、教会に行くのは生まれた時と結婚式と葬式だけという具合に形式化している国もあります。

南フランスを回った後は、イタリアに足を延ばし、パリに戻って、北フランスのシェルブルールから「クイーンエリザベス号」で出航。大西洋を渡るのにどの船に乗っても料金に大差はないので、どうせなら「クイーンエリザベス号」に乗船。ニューヨークまで1週間の航海でした。

「ラ・マルセイエズ号」は5、6階建てでしたが、「クイーンエリザベス号」は、10階建てのビルディングみたいなもの。プールや図書室、床屋と何でもありましたね。贅沢な船旅でしたけど、ポツンと一人じゃしやう





ラ・マルセイエズの船上にてイタリア人神父を囲む留学生



スイス・フリブール大学に到着した日に

がない。神父が2、3人乗っていたから、すぐに仲良くなつて一緒に散歩したり、シスターも神父に敬意を表して話し相手になつてくれたり。アツという間の1週間でした。

アメリカではニューヨークからシンシナティ、セントルイス、テキサス、サンフランシスコと大陸を横断。ハワイまでプロペラ機で飛び、ハワイから日本に飛行機で戻りました。

マリア会は世界的な組織なので、前もつて各地のマリア会の教会や学校に手紙を出して宿泊をお願いしてきます。同じマリア会の神父ということで、無料で泊めてくれるし、食事も出してくれます。観光案内もしてくれました。

当時のアメリカ人の生活は、日本とは比べようもなく豊かなものでした。修道院の部屋もキレイで広くて、トイレも付いていました。食事には肉が出るし、冷蔵庫はもちろん冷凍庫までありました。日本では自家用車などごく一部の人が持つていない時代に、ハワイでは農民がキャデラックに乗つて畑まで出かけているんです。

アメリカ大陸を横断して、その広さを実感。カリフォルニアの軍港や砂漠の中にある軍隊の訓練所の充実した設備、豊富な物資——これでは日本が戦争に負けるのは当たり前前だなど思いました。

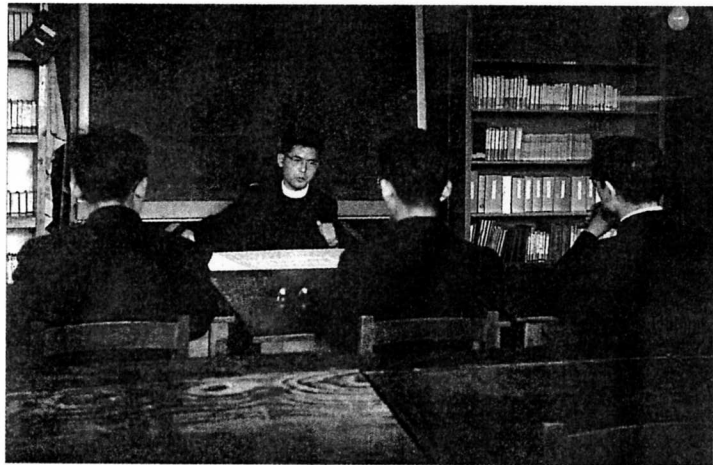




帰国を出迎えたマリア会士と兄（左から2人目）とともに



日本人司祭の誕生を祝う現地の人々



後輩の神学生への指導



上の写真同様日本人司祭の誕生を祝う現地の人々